中国四国教育学会　教育学研究紀要　第41巻　第2部（1995年）

ネパールにおける体育教育の実情（V）

――ベグナス村におけるNGO活動を通して――

松　岡　重　信
（広島大学）

はじめに

これまでの報告は，過去3度のネパール訪問およびネパールからの4度の教育関係者（行政官・教師）のわが国招聘訪問と，共同のユネスコ APEID 識字教材開発研究のプロセスから得られた情報を整理してきたものである。本年の7月下旬にも，Mr.Gajendlaがアメリカ出張の帰途しばらく滞在し，日本国内視察をした。広島で約1週間の滞在中，福山市内の学校見学（高島小学校，向丘中学校，大門高校）や瀬戸大橋・鳥取・出雲ドームなどを見学してもらった。さらに海外協力体育隊員としてネパールに赴任経験をもつ長崎大学の金田女史が，長崎市や愛知県で滞在を世話し対応した。これまでのレポートでは，教育的状況のみならず，生活全般にわたって貧弱な状況と未整備な生活環境ばかりを浮き彫りにするような報告をしてきた。しかし，基本的にそれは，ある種の事象に対する判断尺度がどちらにあるかということであって，例えばⅣ報でもふれたように大らかな，ゆったりした時間の流れを感じさせるところは，筆者自身からみても大きい魅力の一つである[1]。この時間の流れや生活リズムは，一旅行者としても観察者としてもネパールを訪問する際の大きな魅力となり得ているように感じるが，同時にペースが合わない元凶でもある。

これまでの4報を整理してきた段階と異なるところは，現地住民大衆の日常生活からは異変とか緊張とかは感じられなかったが，ネパールの政治体制に共産党が最大議席を確保し，政権党となった（1994/11）ことがまずあげられる。但し，王政は伝統的に確立されており，政治的にも大きな権力をもっており，国王は民衆にも大いに尊敬されている。そして事実，共産党を中心とした政権は1995年9月には崩壊しているとの報道があった。ただ民衆の生活様態と，この政変の関係は部外者のわれわれにはほとんど分からなかったし，理解できてもいない。間接的に理解できたことは，われわれが直接コンタクトをもってきたカリキュラム開発センター（CDC）の責任者ドケンドラ氏が文化教育省の事務次官に抜擢され，それをネパール通の日本人は「彼はこれまでいっさい賄賂の授受がなかったからだと思う」という評価は，政変のなかの人事の一面を浮き彫りにしているように思われた。

この度の4度目のネパール訪問は，これまでのようにユネスコ APIED や識字教材開発事業とは関わりなく，NGO（非政府組織）として活動する東広島市ユネスコ協会の活動に同行したものである。その活動に間接的に関わって協力しながら，NGO 活動とは別個の独自な以下のような研究課題をもって訪問した。NGO 活動の諸活動と絡ませながら報告したい。その課題とは，

①首都カトマンズや観光都市といわれるようなポカラについては，かなり理解できたが，本当の地方あるいは農村地域の学校見学とそこでの体育教育の実情を知ること。=> 対象とするベグナス村が該当するかどうかは若干の疑問もあるが。

②児童の生活そのものを理解するために，マークした子どもをあらかじめ学校関係者と家族に了解を求めて，終日の生活を記録すること。マークする子どもの基準は，極めてありふれた子どもであるということ。

③類推の域は出ないが，②によってネパール国の行政レベルの意志決定とは異なった体育の必要性や運動教育の素朴なあるべき姿が見えてくるのではないかとの期待が少しあること。

こうした課題意識は，いずれも事前には相当あやふやなものではあった。また出発前には可能性もよくわからなかったが，幸い現地勤務の海外協力隊員の協力も得られた。情報がやや偏った可能性は否定できないまでも，予定通りの活動を実現できたので，現時点でのネパールに対する一つの認識として書きとどめておくこと自体が本研究の目的である。

Ⅰ　東広島ユネスコ協会NGO活動と今回の事業の概要

東広島ユネスコ協会は，ユネスコ活動の一環に位置づく地方の団体であるが，ユネスコ本部（パリ）やユネスコアジア本部（バンコック）との直接の関係は不明である。直接的には日本ユネスコ協会の支部団体的

表1　東広島ユネスコ協会主要スタッフ

会　長	高橋　龍子	開業病院長
代　表	江戸　芳江	団体役員
代表（青年部長）	加藤　恒光	写真家
事務局	久保　和子	市役所職員

1995年ＮＧＯ活動参加スタッフは全員で12名であった。

ポジションをもつ。いわば通常の民間ボランティア団体と呼んでも差し支えない性格をもつ。日本ユネスコ協会は，世界的支援活動の中で,「寺子屋方式」ともいえる独自な教育に関する地域密着型支援を展開する一つの方向性は明示している。今回の活動も一応そうした位置づけが可能と思われる。

また，東広島ユネスコ協会は様々な地域活動に積極的にかかわってきた歴史をもっている。例えば，障害者の絵画展を開催し続けたり，地域興しの催し物に協力したり，外国人留学生の世話をしたり，交流事業をする等の活動をしている。表1が今回ネパールを訪問した主たる構成役員であり，総勢では筆者も含めて12名が参加した。内男性は4名で，相対的には旅慣れたメンバーであった。

この東広島ユネスコ協会とネパールのかかわりの初期状況は詳細には理解できていないが，東広島ユネスコ協会青年部長の海外における活動に誘発され発展したものと理解される。その青年部長加藤恒光なる人物は，写真家であるとともに多様な活動を展開している人物で，英語も堪能であり，海外訪問国も40カ国以上と経験が深い。筆者が関係をもち始めた経緯からみれば，この加藤氏とネパール在住約20年になるという和田正夫氏なる人物（彼は JICA 専門員として，ポカラ近郊の養魚場の設立運営に当たってきた人物で昨年ネパールの女性と結婚）との交流から，ポカラ近郊のベグナス村の教育支援活動の準備が進められてきたと理解される。それが東広島ユネスコ協会組織全体の一大事業として承認されてから本格化したものとみなせる。何故ベグナス村かという点に関しては，既に1994年駐日大使リタール氏からノミネイトされてきた経過もあり，あらかた予備活動が次の一つの活動で典型的に開始されている。つまり，ポカラにおける観光地の湖に浮かべるボートのオーナ制度を取り入れ，オーナーである東広島の関係者が，現地の子ども達にボートを貸し与え管理をさせて，そのボートを観光客に使わせて得た金で学校に行く費用を捻出するという方式である。こうした，諸活動を前提にして今回の活動が本格化してきたとみなせる。

今回のこの事業の内容の概略は，現地ベグナス村に「文化会館」的な教育施設を建設し，子どもも成人も含めて，かつ向こう10年程度の間接的経済支援を続けながら，現地住民の自活と自助努力を促すという点で，かなり独創的な支援プログラムといえる。つまり，国際間にまたがる支援活動や援助活動は，多くの場合「金」と「物」を提供し，一時的関係として展開されることはあっても，また「施設」や「器械」は贈呈されても，長期的な支援として計画的にやりとりしながら実行されることは少なく，これは民間レベルでも行政体レベルでも同じような性格をもってしまうことが指摘されてきた[2)]。彼らはこうした援助のあり方や失敗事例を学習しながら，東広島市のミニコミ紙の協力を得たりで募金活動を行い，一方でベグナス村とのコンタクトを先述の和田氏を介しておこなってきた。また,「文化会館」の建築物の設計担当には，やはりネパールに詳しい杉田修一氏（岩手県在住）なる人物が，担当し準備を展開してきた。この支援プログラムが，既に本格化し，展開されつつある1994年の春頃から筆者も参加するようになった。

彼らの支援プログラムの特徴は，彼ら自身がオリジナルとして誇りにしながらも，一方で非常に心配もしている現地住民の自助努力を促進するというポイントに見られる。学校建設支援や植林・養殖事業など，個人または団体，国家支援がハードを造ることに重点が置かれていて，ハードが完成すれば一応それで完了というところの問題への反省的意味が込められたパイロット・スタディー的な性格をもっている。従って，長期的には，東広島ユネスコ協会の支援の成りゆきを，第三者的に観察してゆくことも一つの課題になりうる。このプロセス評価については，別個に東広島ユネスコ協会の約10名が確認と今後の支援について調査するために1996年1月7日から現地を訪問する予定になっている。

なお，この支援プログラムで筆者の関与の仕方は，子ども用図書，成人用図書などの購入手続きで，CDC のスタッフ Mr.Gajendla と海外協力隊で CDC のスタッフでもあった古賀伸矢氏に依頼し，カトマンズ市内で調達してもらうための交渉と，購入図書をカトマンズからベグナス村での会館竣工式に間に合うように運搬し整理することが業務であった。なお補足的にい

表2　1次支援物資（会館に収納するもの）と会計概要

1　建　　物　総面積約60坪相当の2階建て総コンクリート製	
2　運動用具	
・卓球用品　ラケットなど	20,840
・バドミントン	14,650
・なわとび	6,800
・ボール類（サッカー，バレー）	34,000
3　文 房 具	17,900
・四つ切り画用紙	
・クレパス	
・ノート鉛筆消しゴム	
4　図　　書　約2,000点	94,000
5　書架物入れ類	
6　インド製ミシン　2台	—
7　会館管理者の給料　1カ年分	36,000

会館設立募金として¥2,828,947（募金応募者総数64名）に有力者の寄付金が相当含まれているものと理解される。

えば，図書費約10万円は先述の加藤氏はじめ4人のメンバーで構成されている「地球クラブ　ナマステ」という音楽団体が東広島市の地域公民館でコンサート（ナマステ　コンサート）を開いて得た1年間の収益金が当てられた。

これら資金によって購入された図書類約2,000点は，CDCスタッフと古賀氏夫妻によって整理された。これらの使用については，原則として会館の図書室で読んでもらうこととし，今しばらくは貸し出し禁止措置をとらざるを得なかった。理由は「図書貸し出し」といった習慣が未定着であることと，図書自体の材質が良くないために，乱雑に扱うとたちまち破損することが考えられたからで，これには現地の校長や村役員で構成されている「会館管理委員会」も同意した。

竣工式は，出張のついでによってくれた日本大使をはじめ，村人約2,000人が出席し，盛大におこなわれた。われわれは花首輪を何重にもかけてもらい，感謝のしるしの舞や長いスピーチを貰ったりしたが，さすがに疲れていたのを自覚していた。それというのも，竣工式の前日に文房具・図書やスポーツ用品，そして記念にかける写真を山頂に近い学校の近くの「会館」に搬入した。しかし，この時骨格工事は終了していたものの，窓枠工事や内装外装の工事の真っ最中であった。とても明日竣工式典が開催されるような状況とは考えられなかったのである。そして最後の仕上げ工事の一つである「Tatsuko Takahashi Culture Memorial Center」のパネル（東広島の陶芸家が作成したもの6枚組パネル）を埋め込む段階まで工事を見守っていたからでもある。なお，このパネルは，陶器製であり，割れる可能性があるということで，筆者を含めて3名の男性参加者が各自の手荷物にして機内持ち込みをして運んだもので，参加者全員は無事飾り付けが終わった時には歓声をあげていた。会館は尾根筋の山頂に近いところで，近辺には農家が点在している。ベグナス村の学校（Amar Shddha Namuna High School）がある尾根筋の山頂部から，幾つかの懐中電灯でバスターミナルまで歩いたが，約3㎞の未舗装の山道で，「時折豹が出没するから注意して…」とか「明日の朝までに工事が完成して，竣工式典が本当に開かれるのか…？」とか話しながら歩いたが，身体がシャンとしている割には不安だらけという途中経過をふんでいたからである。

ベグナスから一番近い大きな街はポカラであるが，ポカラを離れるまでに，インド製の脚踏みミシンを2台調達し，これも会館に納入して貰う手続きを，ユネスコ協会の女性スタッフ達がおこなった。残る大半の打ち合わせを和田氏に託した形であるが，和田氏には時折現地を尋ねてもらい，加藤氏を中心にコンタクトが取られることになっている。ところが既に，幾つかのトラブルめいた事態が生じつつある。その一つは和田氏が任期満了になること，また図書追加購入費としてポカラに赴任中の協力隊員井戸さつき女史に託されていた基金が，会館の向かいにある学校の水道施設の補修に使わせて欲しいなどの連絡がランダムに筆者にまで入ることである。現時点ではこれを凍結し来年1月に，スタッフ10人程度が現地入りする予定で作業がすすめられていている。セカセカと予定通りもの事を運んでいく日本人の気質と，おおらかに呑気に適当にもの事を考えていく気質がどこかでぶつかる可能性はどうしても拭いきれない。また，この協力支援事業が後10年の支援でどんな姿になるか，大げさにいえば失敗に帰するか，ある程度の成功をおさめ，一つの支援モデルになりうるかは，今後の展開過程次第であるが，先述したもの事の考え方のリズムが合うかにどうかにかかっているようにさえ思われた。とりあえずは，来年訪問するメンバーの事後報告を聞けばある程度みえてくるように感じている。

Ⅱ　ポカラにおける陸上競技大会

ポカラ滞在中，最後の2日間は，東広島ネパール協会訪問部隊とは別行動を許して貰い，学校訪問と子どもの調査に入った。この間，先述の井戸さつき氏がサポートについてくれた。

別行動の1日目には，ポカラ近辺の高校生の陸上競技大会と丁度日程が合致していて，彼女も間接的にこれにかかわっていた。筆者はホテルから朝直接歩いて競技場を訪ねたが，途中で道に迷い空港を一回りして1時間ぐらい約束の時間におくれた。この辺は実におおらかなもので，井戸女史も笑いながら待ってくれていた。競技は既に始まっていて，その競技風景を記述しておく。

砲丸投げや400メートルリレーを観察していると，砲丸投げでは試技の度にマーカーは移動させるが計測はないまま順位は決定して表彰状が渡される。400メートルリレーでは，選手のほとんどは競技用シューズではないまでも靴をつけて走るが，素足で走る者も半数ぐらいいた。観客席は，200人ぐらい収容できるスタンドもあるが，この上から眺めたのはわれわれを含めて数人ぐらいで，他の観客といっても50人程度は，トラックの外側に盛り上げられた芝生の丘から眺めている。トラックやフィールドの外にはたくさんの牛がいるし，この牛達が芝をきれいに喰ってくれることで刈りこまれている。日本の垣根やコンクリで仕切られた風景とはまるで異なっている。一応選手達は運動着ら

しきものはつけているが，さながらその風景は，わが国の町内運動会めいた景色であった。圧巻は選手達は幾つもの種目にエントリーしているらしく，表彰式のたびに賞状をもらって着替えの上に置いておく。するとどこからか近寄った牛がその賞状を食べてしまうといった風景も観察された。選手達は大声で騒いで取り返そうとはするが，その表情は笑っている。賞品らしきものはなく，賞状がわたされるだけであるが，これはそれなりの意味をもっているらしく誇りの一つであると説明を受ける。

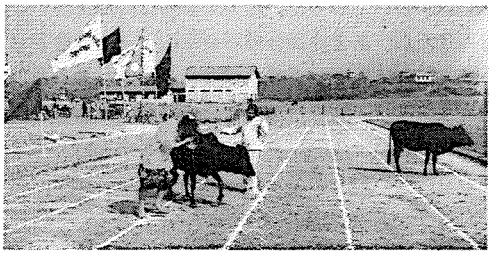

写真１　ポカラの陸上競技場における牛事件

競技場の近くには，自転車でアイスキャンデーを売っている老人がいたり，競技場にはどこからでも誰でも出入りが自由で，運営を担当しているのは近隣の学校の教師達数人で，運営部局は一人がけの机２つである。その日は，晴天であったが，子ども達は泊まり掛けできているものもいて，宿泊の余裕がないから余ほどの天候でも競技会はやってしまうとのことであった。特に400メートルリレーでは声援も大きく，最初からオープンコースで，バトンドーンもラインがないとかいえば限りなくおおらかそのものの競技会であった。競技場のメインスタンドは，先述したように200人程度を収容する２階建てのコンクリー製であるが，１階部分は通路の他に競技用具を収納しているスペースが造られている。通路部分もそうであるが，何やら少しにおう感じがあるし，何かがあちこちにへばりついている。井戸女史に何なんだとたずねると，牛の糞を片づけた跡だと説明があった。つまり，放し飼いになっている牛達は雨期の季節になるとこの１階の部分をねぐらにするらしく，册をしていても直ぐに壊されてしまうとのことであった。カトマンズのスタジアムでも見慣れない風景であった。

Ⅲ　少女の１日の生活を追跡して

子どもを観察しつづけるという計画とついでに学校にも入り込む目論見は，あらかじめ井戸女史に依頼しておいて，実現したものである。彼女は，海外協力隊体育隊員として学校関係や地域の教育事務所を主たる活動の場にしているから，学校の女性経営者は快く観察を許してくれた。ポカラのような都市部では，ビジネスとして経営される私立学校が結構多く，公立の学校を上回る勢いがあるという。また，親達にも私立校に通わせることにステイタスがあると考えているらしい。この学校に通う子どもをマークすることになって，井戸女史が２軒の家族と予備交渉をもってくれていた。１軒は子ども６人を含む家族10人の家族で，職業は不明であるが，学校の敷地に隣接していて，畑ももっていた。もう１軒は，子ども１人であるが，アパート経営で生計をなしており，父親が酒におぼれているとか，母親がひとりできりもりしていてとか，さらに離婚して出戻りの女性もいるとか，それと祖母で形成される５人家族であった。これにアパートの住人が７～８人ぐらいで，彼らが一つの家族のように生活している。居住建物と台所（食堂）が別棟になっていて，比較的広い敷地をもっている。水道栓も１つであるが，洗濯場に使われると思われる別棟の外に設置されていた。煮炊きのエネルギーは，ここでは薪ではなく，石油を圧縮してガス化して使うバーナであった。

どちらの家族を選ぶかとなって，迷いはあったが，後者のアパート経営の家族につくこととした。マークする子どもはニールと呼ばれる５年生（10才程度）の女の子にした。一般論としても彼らの生活は朝が早く，午前６:00頃には活動を開始する。筆者は７:00にこの家族を訪問して，生活を観察しはじめた。一応テレビももっていて，アパートの２部屋を家族が使っている。私が訪問した折りには，ニールは勉強をして，その日の準備をしていた。別の家族の子どもと一緒に勉強したり，母親の仕事を手伝ったりしている。午前９:00ころから食事がはじまり，筆者も客待遇を受けて一緒の食事をした。伝統的な金属製の大皿に盛りつけられた食事で，大盛りのごはん（長粒米）に，カレーに似た煮汁と野菜などがたっぷり盛ってあって，基本的作法としては右手だけを使って指ですくうようにして口に運ぶ食べ方である。この時は，ホスト役として父親も威厳をもって，食事につきあってくれた。食事の後，アパートの屋上に登り，近くの住民も混じって雑談がはじまったが，ことばの理解できない苦しさを痛感していた。あとの事はしぐさや目線と少しの英語で何とかなるものであった。

学校がはじまるのは，午前10時からでこれも実にゆったりしていた。９:30には子ども達が学校に集合しはじめ，一応朝礼にあたるような儀式があって，整然とでもないが各教室に入っていく。この私立学校は，目下のところ中学校の途中学年までしか教室の余裕をもたず，教師もそれに対応した数しか採用されていない。まかないのおばさん１人を含めて12人程度のス

タッフで，生徒数は約200人程度と観察された。手空きの教師達は，天気がよかったせいかグランドの外に持ち出した長机について，作業をしたり雑談をしていた。

昼の時間になってまかないのおばさんと経営者の祖母と思われる人が，赤いポリ皿をグランドに並べる。何がはじまるのかと観察していると，日本流にいうところの初期のインスタントラーメンが日本の一人前を2分割ぐらいして，一人前として配られ，十数人が丸い輪になって座り込んで，一斉に食べ始める。子ども達は数分ぐらいで食べ終わる。これも右手の食事で，手洗いがかなり厳しく指導されている。一ヶ所の水道に子ども達が列をつくって手洗いをする風景をみせられた。皿の数が不足しているのか，メンを煮込むのに時間が足りないのか，2回にわけて同じ事が繰り返された。基本的に食事は二回と聞いていたが，これは食事ではなくて，生徒へのサービスとして行われている「オヤツ」にあたるもので，一種の学校経営の「営業努力」であるとあると説明を受けた。確かに過去にみてきた公立の学校では一切みられなかった風景である。

私立学校における「営業努力」の1コマ

校長室に張られている時間割表では，「英語」の授業もあるし午後の授業に「体育」もあったので，眠くなるような時間のなかで，体育の授業を待ち続けた。午後の授業がはじまって，2人の教師達がバレーコートと思われる場所にネットを張り始めた。思われる場所というのも奇妙ではあるが，何か彫り込んだラインがあって，中央部に角材が埋め込んであるだけであり，コートにあたる部分にも石ころや野芝が生えていたりいなかったりで，わが国の相当古い様子を知っている人でもこれをバレーボールコートとは多分認めないと思われる。それでも，バレーボールができる学校ということで，これを売りものにしているようにも思えた。

途中，何度かニールの教室を覗いて，写真をとったりしていると，視線も合うようになり，周囲の子ども達も変に反応しはじめて，日本の教室風景であったら教師に叱られているであろうような風景であった。教室の風景は，細い長机にびっしり子ども達がはりついていて，30～35人が狭い教室について勉強している。私語やワイワイ騒ぐ風景はみられず，まじめ（？）と受けとめられた。窓明かりだけで，電灯もなく暗いが，教師も子ども達も極めて熱心な風景と受けとめた。午後になって間もなく，数人の教師達がバレーボールのゲームをはじめ，筆者たちも誘ってくれたので，上着をとって，後衛に入りそれなりに楽しんでいた。数分すると年齢はよくわからぬが子ども達も空いているポジションに入り始め，それでも余ったものは，周囲からはやし立てたり，ボールひらいをしたりしていた。最初から頑張って教師たちは，これが結構うまくて，どんどんアッタックをしていたが，そのまま30分近くもこれが続いていった。途中で筆者は，汗をかいたのでぬけたが，あと約10分でバレーのゲームは終了した。そのときには見ている者，ボールひらいをするもの40人近くがコート周辺に集まっていたが，実はこれは体育のバレーボールの授業であった。どこで始まった，どこで終わったもよく分からなかったが，先生数人を中心にゲームを一部のものが楽しんだのが，授業であったのである。感覚の違いと言えばそれまでであるが，グシャグシャのままゲームが始まって，グシャグシャのままゲームが終わって，やっていたものは，先生と数人の子どもとわれわれだけで，特に楽しんでいたのは教師であったが，これでも一つの授業ですよといってはばからぬところに大いに感心した。コート1面とボール2個であるから，やむを得ないことと思ってもいたし，自分自身がかなりアバウトにものごとを眺めているのを意識したし納得していた。

ニールはじめ，小学校の子ども達が帰宅をはじめたのは午後3:00頃であった。筆者は，この家族とニールに協力のお礼をいいたいと井戸女史に相談すると，近くの駄菓子屋（ドカンと呼ばれている）でビスケットと飲み物でも買ってやれということで，家族をさそった。いわば，このドカンなるもの，日本の喫茶店と駄菓子屋が一緒になったようなもので，コーラやネパールティーとビスケットで大いに喜んでくれた。街角の通りに長椅子がおいてあって，夕方それに座り込んだ大人も子どもも混じりこんで様々な会話がなされるのは素朴な人間関係の場であって，こうした風景は筆者らの子どもの頃の田舎にもみられた風景であったやに思い起こしている。ノスタルジーだけで観察している側面も否定はしないが，人間関係の健康さが，ある程度環境の影響を受けるとすれば，ある意味では実にうらやましくもある風景であった。

Ⅳ　トイレ考

外国人を泊めるホテルにいては感じられないが，今回ニールの家や学校のトイレを，またその使い方を眺めていて気がかりな風景があった。個人住宅もニール

宅のような集合住宅でも，溜め置きであるが和式に近い便器があって，それを挟む形で足場がセットされているのは共通していた。ただ，この学校の場合5才から15才くらいの女子まで通学していることになる。学生服にネクタイまでしていてしゃれた感じはあるが，そして全体的にはまじめそのものであるが，上級生特有のシャツや小物には，ある種の自己主張を感じさせるものもあった。ところが，女子は低学年で5人程度，上級学年でも2～3人がまとまって，便器一つの少し広めのトイレに入る。交代で使用しているのか，まとまって使用しているのかは判別しにくいが時間的には後者であるように思われる。まとまって使っているとするとどのようなスタイルなのか，学校はどこでもこうなのか不思議な思いをしながらトイレを眺めていた。女性教師達はひとり一人，個別に使っているから，これは時間短縮のための措置であろうと一応理解したが印象に残っている。文化的にどうとかではなくて，基本的に個室使用が原則であろうと思いこんでいただけに，またトイレが学校建物に組み込まれているのをすごいと感じていただけに，不思議な光景として印象に残った。これまでの観察ではトイレは屋外別棟であった。男子トイレは，グランドの隅に溝式の小便溝が2連つくられていて，それはすぐ竹林に導かれていて，素朴ではあるが大して不思議でも何でもなかった。

Ⅳ まとめ

一地方のNGOの活動に参加しながら，そしてその東広島ユネスコ協会が建設し，向こう10年間教育支援を継続展開するこの活動を年度途中からではあるが参加しえたことと，この支援活動がどのように変化していくであろうかについては，若干の思いの違いもあって，第三者的に観察していけるものと思う。

また，ニールというありふれていたかどうかは別にして私立学校に通う少女を追跡し，万歩計までつけてみたが，これ自体は全くナンセンスであった。が，一つの家族に少しだけ近づけたことは，それなりに新鮮な経験であったし，台所や食事づくりにもその家族独特のものがあるらしいことも新しい知識となっている。

陸上競技大会観察も過去2度ぐらいあるが，新鮮な感覚でみたし，ポカラにある諸外国が展開している支援も組織的にはすごいものであった。SOSと略されるオーストラリアの支援学校は，孤児や親が保護能力をなくしている子ども達を収容して寮生活をさせながら，ばく大な敷地に立派な施設を幾つも創って展開している。国家的プロジェクトとして成功事例でもあろうが，ここへの収容を希望する子どもの数は相当に待機中とも聞いている。民衆が支援なれしつつあるともいわれる問題も，これから様々な様相を示すであろうことも興味のもたれるところである。

当初の課題の③には，とてもアプローチできなかったが，それはたまたま追跡した子どもが私立学校のすぐ近くに住んでいたことや，観察に訪れた私立の学校が地方の公立学校にはない条件を備えていたことによる。少なくとも追跡したニールのような子どもは，日本人の子ども達とかわらないほど，運動量は，わずか1日の追跡とはいえ，少なかったことは事実である。が，だから学校の体育を云々しえる程の資料ではないし，われわれの観察にも限界はある。

ネパールは独自に教員養成のシステムを建設しつつあるし，そのことは本年度（1995.7）広島大学ユネスコAPEID事業（The 1995 Seminer on the Universalization of Primary Education: Enhancing Professional Development of Teachers in Primary Educationin Asia and the Pacific Region）で招聘されたトリブバン大学の教育学部長 Dr.Mallaらのレポートにもみられる[3)・4)]。ただ，ユネスコAPEIDのような組織ぐるみの訪問ではまず経験できない部分を，断片的ではあるがかいま見た気がしている。ただ，ネパールそのものを理解しているとか，その文化が理解できつつあるとはさらさら考えていない。気持ちは，例えばもっと西部や極西部はどんなだとか，元気なうちに訪問してみたいとかの期待が膨らみつつある事を記しておく。教育事情の地域差も多少はみえてくると期待できる。

文 献

1）松岡重信：ネパールの体育教育の実情（Ⅳ）－ユネスコ’94年度識字教材開発のフィールドテストとワークショップからみえたもの－，中国四国教育学会教育学研究紀要，第40巻第2部，pp.407－412，1994

2）渡辺利夫，他：日本のＯＤＡをどうするか，pp. 3－6，日本放送出版協会，1991

3）Bajara Raj Shakya:Educational Implication of Change;NEPAL,The Universalization of Primary Education: Enhancing the Qualty of Teacher Education to promote the role of the teacher as a change agent towards the 21 th Centrury, 69－81, 1994

4）Sarbagya Bhakta Malla: Primary Teacher Education in Nepal;The 1995 Seminer on the Universalization of Primary Education Report C7, 1995